



Title	『ガウイン卿と緑の騎士』における象徴性と宗教性
Author(s)	田口, まゆみ
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 64-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25615
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ガウイン卿と緑の騎士』における 象徴性と宗教性

田 口 ま ゆ み

『真珠』(Pearl), 『清純』(Cleannes), 『忍耐』(Patience), 『ガウイン卿と緑の騎士』(Sir Gawain and the Green Knight, 以下『ガウイン』とする)を同一詩人による作とする見方は、一般的に受け入れられているものの、今だ確証はされていない。この問題を考える際、『ガウイン』がロマンスとしての卓越した完成度を誇る作品であるのに対し、他の三つの作品は明らかに教訓的意図を以って作られたものであり、詩人の宗教観を明白に打ち出しているところに、疑惑の一つの根拠があるようである。この試論で、私は、『ガウイン』の内包する宗教性が、他の三つの作品の共通した主題につながるのではないかということを、『ガウイン』に見られる象徴を検討しつつ考えてみたい。

中世文学を読むにあたり、当時の象徴主義を忘れてはならない。ホイジンガによれば、中世人の思考体系は象徴主義を抜きには考えられないものであった。それは、あらゆる現象を、シンボルを介して聖なる理念に照応させてゆく作業、あるいは聖なる理念を、シンボルを介し、地上の事物でイメージ化する作業であった。これは生活のすみずみまで浸透し、中世キリスト教社会は、様々のシンボルにより、宗教的観念にひたりきっていたのだ。中世末期ともなると、この思考傾向は極端に進み、いわば身動きできなくなったという。¹⁾ 『ガウイン』は、そういう時代の作品である。この物語の描き出す華麗なタペストリーには、宗教的テーマが象徴の糸で織り込まれていると考えることができよう。

『ガウイン』における中心的象徴として、まず騎士叙任式の象徴をあげた

い。クリスマスの祝宴もたけなわの一月一日、アーサーの宮廷に馬を乗り入れた全身緑の巨大な騎士が円卓の騎士に挑む「首斬りの game」(Beheading Game)は、その源泉をケルト神話に求めることができるが、『ガウィン』の場合、騎士叙任式の最も重要な仕草との類似が注目される。その仕草は、現在も、剣で軽く肩に触れる形で残っているが、元来、握り拳あるいは平手で首の付根を強打したものであり、儀式的根源的要素である武具授与とならび、常に儀式的中心を成す仕草であった。²⁾ 緑のチャペルでの首打ちが、騎士叙任式の首打ちに対応するとみる V. L. Weiss は、手と剣の両方による叙任が14世紀英国で行なわれており、多くの場合、『ガウィン』においてと同様、剣は三回振り降ろされたこと、他のロマンスで騎士叙任の首打ちを表現している言葉 (smite) を『ガウィン』の詩人も、緑の騎士の首打ちに用いていること、また、当時、増々宗教的色彩を濃くしてきた騎士叙任式が、教会、チャペル等で行なわれ始めたことを、実例としてかかっている。³⁾ 加えて、緑のチャペルでのやりとり以外にも、騎士叙任式を連想させる箇所が散見される。ガウィンの華麗な武装場面は、騎士叙任式が華々しく行なわれた時代の武具授与を彷彿とさせるし、キャメロット、パーティラックの城、緑のチャペルと、三回に渡り告解場面があるが、叙任式を控えた従騎士は、告解を済ませ身を清めておかねばならなかった。何よりも、首斬り場面で、頭を垂れて立つ、緑の騎士およびガウィンの姿勢は、騎士叙任式の首打ちの姿勢である。『ガウィン』が捧げられた中世貴族社会にあっては、宗教的理念は騎士道理想に盛りこまれ、全ての思考が騎士道の規範により進められた⁴⁾ことを思えば、たとえ我々にはルースな象徴に思えようと、象徴に敏感であり、騎士道に精通した中世の人々は、「首斬りの game」から、すぐさま騎士叙任式を連想したに違いない。

騎士叙任式の首打ちは、儀式そのものの語源となったほど重要な意味を持っている。その意味は未だ議論的となっているが、次の五つの解釈が可能だとされている。

1. 叙任式執行者と被叙任者の合意を示す。
2. 記憶喚起の儀式である。
3. 力量をみる最後の試練である。
4. 儀式執行者が被叙任者の魂と肉体に自分の資格を伝える秘伝伝授行為である。
5. 斬首・首のすげかえを象徴したもので、新騎士の生活と地位の変化を強調している。⁵⁾

これら五つの解釈が許されるように、『ガウィン』の場合も五つの解釈にそって論じることができる。1—「首斬りの game」は、両者の合意に基づく規則にのっとるべきことが繰り返し強調されている。2—ガウィンが受けた一撃は、緑のチャペルでの体験の記憶喚起の役割を果し、3—ガウィンの勇気と誠実さを試す最後の試練であった。4と5の推論はとりわけ興味深い。騎士叙任の首打ちと斬首を象徴関係で結ぶ例が5にもあるわけだが、もしこの推測が正しければ、斬首が本来の形である『ガウィン』では、現象とシンボルが逆の関係をとっていることになる。たとえ推測が当たっていないとしても、斬首が地位等の変化を意味するということは注目に値しよう。4の、首を打つ行為を通して旧騎士から新騎士に騎士身分が伝授されるとする解釈は、いかにも尤もだと思われる。そこで、若輩ではあるが、武勇と礼節の誉れ高い、完全を象徴するペンタングル⁶⁾を紋章とするガウィンの魂と肉体に、緑の騎士はどんな資格を伝えようというのかを問わずにはいられない。

その騎士の衣服のみならず、髪も、肌も、乗っている馬をも塗り尽す緑色の象徴から考えてゆきたい。緑は、本来ガウィンの色である。ところがここでは、ガウィンの色は、緑色とは著しい対象を成す赤色に改められている。大胆な試みだと言えよう。ロマンスの慣例を破ってまで、巨大な騎士を緑色にする必要があったのだ。緑色と緑の騎士の間の象徴関係には、深い意味がありそうである。

緑色は、第一義的に植物の色であり、春の新芽と繁茂する夏の草木に象徴される「生命」の色であるが、他方「死人」の色としても良く知られて

いる。これを、「貞節」から「裏切り」へと極端な意味変化をみた青色の例と混同してはならない。生から死への変化は、可能性ではなく必然性なのだ。偶意図の「希望」は、なぜ緑色の衣をまとっているのだろうか。若芽の緑はやがてあせる。緑は、移ろい易い、儂い色だからであった。緑の象徴には、常に「時」が関連していると言えるであろう。

『ガウイン』における色の象徴を考える時、緑と並んで重要なのが金色である。ガウインの武装場面には「黄金」という言葉が連ねられている。ガウインの甲冑およびその馬の飾りには、赤地に黄金の武具、装飾が輝いている。次いで描写される楯には、赤地に黄金でペンタングルが描かれている。さらに、ガウインは「純化された黄金のようであり、罪一つない」(ll. 633-4)とある。至高の色である金色は、ガウインの「誠」(trawthe)を象徴するペンタングルに適わしい色であり、汚れ無い心に適わしい色なのだ。『真珠』には無垢な幼児として身罷った娘の幻影、「真珠娘」(Pearl-maiden)は、黄金の如く輝き (ll. 165, 212); 彼女の暮らす神の国は、ガラスの様に磨きあげられた黄金から作られているとある (ll. 989, 1025)。『ガウイン』の詩人にとって、金色は、罪に汚れぬ、神の国に適わしい、完璧な状態を象徴していたと考えることができよう。この金色が、ガウインのみならず、緑の騎士にも付されているところに、謎を解く一つの鍵があると思われる。

緑の象徴には常に「時」の概念が絡んでいると先に述べたが、ここで、この詩における「時」をみておきたい。詩人は、物語の初めと終わりでトロイ戦争に言及することにより、『ガウイン』に歴史の枠組みを与えている。もちろんこれは、『ガウイン』の詩人の独創ではないが、詩人の時間意識の一つの現れであろうと思われる。トロイは灰と化し、その末裔が新しい国を築く。戦いがあり、緒王が交代する。その中に、詩人は、「幸福と禍いのめくるめく交代」(ll. 18-19)を見ている。このテーマは、第二部冒頭の、有名な、四季の推移を歌った一節で、より鮮明な展開をみている。暖い雨に万物が蘇り、野山が再び緑の衣に覆われる、希望に満ちた春から、

風が荒狂う、暗い、冷い、何もかもが枯れ朽ちる冬へと、時は飛ぶように流れる。宴の興に乗じて始めた「首斬りの game」も、冬の到来とともに、深刻な愁嘆場に入る。しかし、冬はやがて春にとってかわられるように、一つの「終わり」の後には、新しい「始まり」があることも忘れてはならない。詩人は、時の流れの中に、楽しい始まりと深刻な結末の繰り返しを見ている。クリスマスから新年にかけてのこの詩の舞台は、一年の初めと終わりが接する時であり、時のテーマを最もよく象徴している。人々は「神が、我々の運命のために死すべく、この世にお生まれになった時」(l. 996)を祝う。冬の最中にありながら、古い年から新しい年へのターニングポイントに立ち、人々の心は春に向い、再生への期待に踊るのである。この始まりと終わり、生と死が、最も緊迫する一月一日に始まり、終わる「首斬りの game」だが、『清純』にも示されているように、ノアが、箱舟から一新された世界に降り立った一月一日、「首斬りの game」は単に幕を閉じるのではなく、新たな展開への導入となっていると考えられまいだろうか。

春を背景とする伝統的ロマンスとは異なって、冬を舞台とする『ガウィン』では、当然厳しい自然が象徴する、恐怖に満ちた重苦しい雰囲気为主調となっている。緑のチャペルを求めてあてのない旅路につくガウィンが冬が翻弄する。暖をとり、ワインを酌み交わす城内の生活は、城外の現実から逃避した錯覚^{イリュージョン}の世界であったのだ。万聖節の祝賀の直後の旅立ちは、この対比を鮮明に印している。万霊節の日、死者として送り出されたガウィンは、約束を果たし得ぬことを危惧する気持ちに駆られて、ひたすら荒野をゆくが、一步一步、一日一日と近づく死の脅威は、冬の描写と相まって、ガウィンの、そして読者の心に確実に広がってゆく。

旅が第二のエピソードで中断される間も、死のイメージは、狩猟場面のリアリスティックな描写の中で荒狂う。誘惑場面でのガウィンと狩の獲物一鹿・猪・狐一との比喩関係は、よく指摘されるところである。高潔だが臆病な一日目、猪のように抵抗する二日目、狐のように狡猾な三日目。だ

が、この三種の動物は、単にガウインの似姿として選ばれているのではないと思われる。『真珠』に次のような一節がある。

Who nedes schall thole be not so thro.
 For though thou daunce as any do,
 Braundysch and bray thy brathes breme,
 When thou no fyrre may, to ne fro,
 Thou moste abyde that he schal deme. 7)

(苦しみに耐えねばならない者はそのように頑なであってはなりません。たとえ雄鹿のように踊りはねたり、もがいたり、恐ろしい苦しみに叫び声をあげたりしようとも、進むも退くもならない時は、神様のお考えどおり、じっと耐えるしかないからです。)

ここで鹿は、難局に直面し、神の摂理に抗う愚かな不信心者を象徴している。『ガウイン』の鹿・猪・狐も、三様の死に直面した時の振舞い方を示し、死の緊張を高めてゆくとともに、鹿の跳躍も、猪の力も、狐の狡猾さも、神の御意志の前には全く無意味であることを暗示し、ガウインが死を逃れんとして犯す誤ちの前奏を奏でているようである。

当時の人々は、『ガウイン』における死のイメージを、我々よりはるかに身近にとらえていたに違いない。「末期中世程、死に思いを馳せた時代はなかった。」⁸⁾と、ホイジンガは述べている。絶え間ない抗争と、さらに恐ろしい疫病が、死体の山を作った時代である。アーサー王の宮廷に馬で乗りこんで来た緑の騎士同様、死は、楽しい宴の最中にも、いつ泥靴で踏みこんでくるかわからぬ存在であったのだ。人々は万物の盛衰に敏感に反応し、儚いこの世をイリュージョンとし、来世に望みを託した。『ガウイン』の詩人もこのような時代状況の中を生きたのであり、『真珠』、『清純』、『忍耐』は共に「神に受け入れられる術」を主題に掲げている。『ガウイン』では、イリュージョンとしての現世にも光があてられている。「首斬りの game」,「獲物の交換の game」(Exchange Game), 城主婦人との宮廷愛の game。狩も game であれば、追われる動物も game である。こういった具合に、game という言葉およびその類語が頻出するが、イリュージョ

ンは、語源的に「game にはいる」という意味であることに注目したい。さらに、ペンタングルも game だと詩人は言っている。この移ろう世界で、様々な game の役割を演じている人間の無力さが、死という、万人の差迫った関心事を道具として露呈されるのである。

常に死のイメージを伴う緑の騎士、あるいはバーティラックの果す役割も、こういう観点から考える必要があるが、その際、緑の騎士を彩る宗教的色彩を無視してはなるまい。バーティラックの城は、クリスマスのミサに参列せんと胸に十字を切るガウィンの祈りに答えるように突然現われたのであったし、緑のチャペルは、草むした小山に過ぎなかったが、「チャペル」には違いないのであった。また、そのチャペルで、ガウィンは、初め緑の騎士を罵り、悪魔呼ばわりするのだが、後にはまるで告解使に向かうように緑の騎士に向かって懺悔をし、免罪を願い、緑の騎士は、罪の赦免を言い渡すのであった。

緑の騎士、そして「首斬りの game」の宗教性を表わす一例として、首斬りの一撃を意味している dynt, および bur という語があげられる。これらの語が、この詩人の他の詩でどのように使われているかみてみよう。

『真珠』では、「私」が、「真珠娘」の幻影を見た時の衝撃、また、「私」が、神の園とこの世を隔てる川を渡ろうとした時、それを阻止し、夢から現実へと引き戻す力を意味している。特に『忍耐』では、神が人に課する試練、神の怒り、総じて神意を表わしている。緑の騎士が、ガウィンの首に打ちおろす一撃も、同様に神意を帯びていると考えられはしないだろうか。

我々は既に、この一撃が、騎士叙任式の首打ちを象徴し、騎士道理念の中でも騎士叙任が優れて宗教的であることをみてきた。そこで次に、『ガウィン』における騎士叙任の意味を考えてみたい。緑の騎士は、最初、片手に大斥、片手に柁の枝を携えて登場した。大斥は、黙示録の蒼い馬に乗った「死」の持つ剣、あるいは偶意図に描かれる「時」、「死」の持つ大鎌⁹⁾を想起させるが、「森が裸になる時も、青々とした」(I-207)と描写される

柁は、大斥の破壊的イメージを修正するものであると思われる。葉の緑は、やがて枯れ朽ちるからこそ「死」の色でもあったが、常緑の柁にあっては、「死」の象徴を排除し、永遠の生命を象徴するからである。「後期中世は、死に関して、諸業無常の嘆きと、至福のうちに救われる魂を想っての喜びという二つの極端な考えしか知らなかった」¹⁰⁾と、ホイジンは記しているが、死の斥と永遠の生命の柁の組み合わせは、いたって中世的であると言えよう。死と生、あるいは再生は、共に緑色で象徴されると繰り返し述べてきた。緑の騎士が、叙任式執行者としてガウィンに伝えようとしたのは、この死と生ではなかったのだろうか。真の騎士とは、神の国で、神と聖母に任える騎士のことであろう。そして、神の国に入るためには、「真珠娘」が「私」に喩すように、まず「肉体が土の中に冷たく埋められなければならない」(l. 320)のであった。同じく『真珠』の、14万4千人の子羊の花嫁たちの行列は、数多の騎士が聖母にかしづく図を連想させる。

「死」と呼ぼうと、「時」と呼ぼうと、緑の騎士は神の御使い、あるいは道具としてガウィンに遣わされた者だと言えよう。神は、人をお試しになるのに予告はなさない。しかもヨブの例もある。ガウィンが自分の犯した罪を、アダム、ソロモン・サムソン・ダビデの罪になぞらえ、この男性達を罪に誘った、イヴをはじめとする女性達に、城主夫人をなぞらえていることを参照できよう。緑の騎士の行動が、モーガン・ル・フェイ(Morgan le Fay)の考えに困るものであったことが、緑の騎士の口から明されるが、これは、物語をアーサー王伝説の鞘に収めようという手段にすぎまい。物語のレベルでの操作であり、深層的意味にまで関わらないと私は解釈する。

さて、ガウィンの罪は、他ならぬ生命惜しさの故であったから咎は軽いと、緑の騎士は寛容さを示している。しかし、どんな些細な罪でも、罪は罪。神の前では一点の汚れも許されないと、詩人は『真珠』、『清純』で繰り返し説いている。騎士叙任式では、沐浴が清めの水であり、第八の秘蹟に数えられていた。『ガウィン』には沐浴への直接の言及はないが、緑のチャペルの傍らを通れる川が、清めの水を象徴しているのではないかと思わ

れる。『真珠』において、「真珠娘」と「私」を隔てる川が、「生命の川、身を清める洗礼の水、神の恩寵による清めの水」¹¹⁾であることを忘れてはならないであろう。約束の緑のチャペルに立つ緑の騎士とガウィンの間にはだかる溪流は、まるで煮え立っているかのように泡をたてて流れ、まことに印象的であるが、その川を渡ったのはガウィンではなかった。緑の騎士が一跳びに越えたのだ。その前日、緑の帯を受け取った直後の告解で、ガウィンは全ての罪を告白し、清められたとある。とはいえ、告解後、噂偽わりの無いことで誉れ高いはずのガウィンは、城主にその帯を受け取ったことを隠し、しかも、その罪を恥じる様子もなく、堂々と帯を身につけて約束の場に赴いたのであった。清めの小川を渡ろうともしなかったガウィンは、汚れた姿のまま裁きの場にのぞんだことになる。狩猟場面で、追われる鹿は小川を渡り、猪は小川の中で緑の騎士と戦い、倒れるのだが、ガウィンが罪に陥る三日目、狐狩りに小川の描写がないことも示唆的ではなかろうか。

罪の印、緑のチャペルでの体験の印として、改めて緑の騎士から贈られた緑の帯を身体に斜めにかけた時、その帯が楯と上着の胸の紋章を斜めに分かち、ペンタングルの象徴が崩れたことに、当時の人々は即座に反応したのであろう。理想化されたアーサーの世界の卓越の騎士でさえ完璧ではない、すなわち、完璧な人間など望めないことになる。そこで、アーサー王の宮廷では、こぞって、ガウィンに倣い、人間の罪深さの印として緑の帯を身につけて我身の戒めとし、「緑の帯を付けた者は、未長く称えられた」(I. 2520)のであった。このように、緑の騎士のものであった緑の帯は、ガウィンの犯した罪、ガウィンの失墜を象徴するのみならず、神の国に続く道の標となったと言えるであろう。『ガウィン』にも、『真珠』、『清純』、『忍耐』と同様のテーマが底に流れているのである。すなわち、人間は罪深いこと、故に神の姿を拝まんと欲すれば、定められた運命を堪え、神の教えに従い、罪を悔改めて神の御慈悲を仰ぐべきことが根底にあるのである。

テーマを一にしながらも、それぞれの作品において、視点、取り組み方、手法にこれ程までの変化をみせているところは、この詩人の天才と言えよう。『忍耐』は、予言者ヨナをコミカルなタッチで描きつつ、神意に抗う愚かさを説き、『清純』は、汚れた者に対する神の怒りの激しさを、ノアの洪水、ソドムとゴモラ、ベルテシャザルの宴の叙事詩的描写を以って示し、身の清めを説いている。『真珠』は、燦然たる神の国と、そこに受け入れられた者の栄光を幻影のうちに示し、やがては自らも天上の真珠と輝くべく、神の御心に適った人生を送るようにと説く。『ガウィン』の場合は、単刀直入な他の三作とは異なり、多くが象徴を通して語られ、まさに「音楽を聞きながら何事かを意識するような具合」¹²⁾なのだが、『ガウィン』はあくまでロマンスとして意図されたのであるし、良きキリスト者を主人公にしていることもあって、死の脅威を媒介としつつも、教訓としては穏やかな調子を保っている。詩人自身の態度にもゆとりがみられる。罪を告白し、我身をさいなむガウィンを前に、緑の騎士も (l. 2389)、キャメロットの面々も (l. 2514)、「高らかに笑い、慇懃に」、ガウィンをなぐさめている。しかたあるまいと肩をすくめる詩人の姿がそこにうかがえる。とはいえ、ガウィンを弱き罪人として放置しているわけではない。ガウィンが緑の騎士にした懺悔は有効であった。その証拠に、罪の印として首に受けた傷は、アーサーのもとに帰るまでに完全に癒えたこととある。懺悔を通して、人は一歩成長する。それは、曇った宝石を磨く作業に喩えられる(『真珠』ll. 1125-32)。ガウィンは、この失策を通し、騎士の誉れに磨きをかけたことになろう。しかも、緑の帯を身につけたガウィンは、宝石を磨くことを怠らなかったであろう。来たるべき日には、真珠として、唯一絶対の王に仕える騎士として受け入れられたであろうことが暗示されている。

そして、次の結びの六行は、ガウィンの冒険が、ガウィンだけの、一回限りの問題ではないと言わんとしているようである。

After the segge and the asaute watz sesed at Troye,
iwysse

Mony auntez here-biforne
 Haf fallen suche er this.
 Now that bere the croun of thorne,
 He bryng vus to his blysse ! AMEN. ¹³⁾

(トロイの包囲攻撃以来、実際、今日までに、このような冒険が数多くこの地にあったのだった。さて、茨の冠を載くあの方が、至福へと我々をお導き下さいますように。アーメン)

註

- 1) J. Huizinga, *The Waning of the Middle Ages*, trans. F. Hopman (London : Edward Arnold Ltd., 1924), 邦訳、堀米庸三, (中央公論社, 1979), Chs., XII, XV.
- 2) Philippe du Puy de Clinchamps, *La chevalerie* ("Collection 'Que sais-je?'" No. 972, *Presses Universitaires de France*, 1966), pp. 40-41, 邦訳 川村克己, 新倉俊一 (白水社, 1978), pp. 42-44.
- 3) Victoria L. Weiss "The Medieval Knighting Ceremony in *Sir Gawain and the Green knight*", (*The Chaucer Review*, Vol. 12, No. 3, Pennsylvania State Univ. Press, Winter 1978), pp. 183-9.
- 4) Huizinga, *op. cit.*, Ch. IV.
- 5) Puy de Clinchamps, *op. cit.*, pp. 40-41. 邦訳, p.43
- 6) 図参照。
- 7) *Pearl*, ed. A. C. Cawley and J. J. Anderson. (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1976), ll. 344-48.
- 8) Huizinga, *op. cit.*, p. 124, 邦訳 p. Cf. 268.
- 9) Cf. 緑のチャペルで、緑の騎士が大斥を磨く音は「大鎌を磨いているような」と描写されている。
- 10) Huizinga, *op. cit.*, p. 135, 邦訳 p. 289.
- 11) Cawley and Anderson, *op. cit.*, p. xiv
- 12) Huizinga, *op. cit.*, 邦訳 p. 393.
- 13) *Sir Gawain and the Green Knight*, ed. J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, rev., Norman Davis (Clarendon: O. U. P., 1967), ll. 2527-30, ここでは、便宜上、一部現代綴りに変えた。("th")

